

March 22, 2026

## ピラトの前に マタイ 27:11-14

27:11 さて、イエスは総督の前に立たれた。総督はイエスに尋ねた。「あなたはユダヤ人の王なのか。」イエスは言われた。「あなたがそう言っています。」

27:12 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。

27:13 そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」

27:14 それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。

エルサレムには、イエスが十字架を背負って歩まれた道、「ヴィア・ドロロッサ」（悲しみの道）があります。その道筋には14の「十字架のステーション」が配置されています。それぞれのステーションで、聖書や伝承が伝える出来事を思い起こして、イエスの十字架の苦しみを偲ぶのです。

けれども、誰もがエルサレムに行けるわけではありませんので、実際の十字架のステーションになぞらえたものが、修道院や教会の庭に作られるようになりました。また、一つ一つのステーションを描いた絵画やレリーフ（浮き彫り）が、礼拝堂に飾られるようになりました。礼拝堂を一回りして、十字架のステーションをたどることができるようになっているのです。

### 一、ユダヤ人の罪

「十字架のステーション」の第一ステーションは、イエスがピラトの前に立たれた場面です。なぜ、イエスはピラトから裁

判を受けなければならなかったのか。ピラトはどんな気持ちでイエスの裁判にかかわったのか。その裁判でイエスはどのような態度を貫かれたのか。そうしたことを思いみることによって、イエスの十字架が自分にとってどんなものなのかを、しっかりと理解したいと思います。

イエスの十字架刑を許したのは、ローマ総督ピラトでしたが、イエスを捕まえ、罪に定めたのは、ユダヤの指導者たちでした。彼らはまだ夜が明けないうちに、緊急の宗教裁判を開きました。そして、イエスをこともあろうに冒瀆罪で死刑にするという判決を下したのです。イエスは神の子であるはずがないから、イエスが自分を「神の子」としたのは冒瀆罪であるというのです。神をあがめ、父のみこころに完全に従ったイエスのどこに冒瀆の罪があるというのでしょうか。神を冒瀆していたのはむしろ、ユダヤの指導者たちのほうでした。

イエスの時代、ユダヤの地は、ヘロデ大王までは、「ユダヤの王」によって、その後は「領主」たちによって治められていることになっていましたが、実際には、エルサレムにローマ総督の官邸があって、ユダヤ全土はローマ帝国の支配のもとにありました。ユダヤの指導者たちはローマ総督の支配を快く思っていなかったはずですが、それなのに、彼らは、総督ピラトにイエスを引き渡したのです。ユダヤの民の自治、独立を唱えていた人たちが、自分たちの民の一人を、わざわざローマ総督に引き渡したのです。なぜそんなことをしたのでしょうか。

それは、ユダヤで許されているのは「石打ちの刑」までで、十字架刑を行えるのはローマ総督だけだったからです。イエスを亡き者にしようとした者たちは、イエスの命を奪うだけでは満足せず、イエスを徹底的に辱め、おとしめ、苦しめるために

十字架刑を要求したのです。それはイエスへのねたみから生まれ、そこから変化した憎しみが理由でした。それに、自分たちで石打ちにせずローマの権力で十字架刑にしてもらえば、自分たちの手を汚すことがなく、また、責任をローマに押し付けることができると思ったのでしょう。罪はどれも醜いものですが、この時のイエスに対する罪ほど醜いものはありませんでした。彼らがどんなに責任をローマに押し付けようが、神は、彼らの責任をきちんと要求なさるのです。

## 二、ピラトの罪

ユダヤの指導者に比べれば、ピラトはまだ良心が残っていました。ピラトは、ユダヤ人がイエスを訴えてきたとき、それがユダヤの宗教の問題であり、しかも、イエスに対するねたみからのものであることを良く知っていました（マタイ 27:18、マルコ 15:10）。また、ピラトは、妻から「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから」との伝言も受け取っていました（マタイ 27:19）。

それで、ピラトはユダヤ人の要求を門前払いしようとしたのですが、ユダヤ人はピラトにしつこく迫りました。祭りのときには囚人の一人を恩赦する慣習があったので、ピラトはそれを使って、イエスを釈放しようと思いました。しかし、群衆は「その人ではなく、バラバを」と叫び、強盗のバラバを釈放し、イエスを十字架につけるよう要求しました。

その間に兵士たちはイエスを鞭打ち、紫色の衣を着せ、茨の冠をかぶらせました。鞭打たれ、嘲られ、弱りきったイエスをピラトは人々の前に立たせ、「見よ。この人だ」（ヨハネ

19:5)と言いました。人々がイエスの姿を見て同情し、十字架を要求するのをあきらめると思ったのです。ところが、ユダヤ人はピラトを脅して言いました。「この人を釈放するのなら、あなたはカエサルの友ではありません。自分を王とする者はみな、カエサルに背いています。」（ヨハネ 19:12）この言葉を聞いたとき、ピラトは、今、ユダヤ人に逆らったら、自分の地位が脅かされると感じました。そして、正しい裁判をするよりも、自分を守ることを選んだのです。

ユダヤの地は、古い歴史を持ち、他の国々とは違った宗教を堅く保っている人々のいるところ、ローマ帝国にとって治めるのに一番難しい場所でした。ピラトはその総督として任命されたわけですから、優れた人物であったと思われます。彼はユダヤ人の策略を見抜いていましたし、イエスと顔と顔を合わせて会い、短いですが、真理について、神の国について言葉を交わしています。イエスに罪はないと宣言し、釈放する手立てをとりました。しかし、最後には、自分を守ろうとして、正しい判断を取り消し、イエスを十字架刑に引き渡したのです。そこにピラトの罪がありました。「良心」の声を消し、イエスから受けた光に目をつむり、公正な裁判官でなければならないという役割に背いたのです。それはユダヤの指導者たちのようなあからさまな罪ではなかったでしょうが、神の目には同じ大きな罪だったのです。

### 三、イエスの姿

イエスを責め続けてやまないユダヤの指導者、それに同調して騒ぎ立てる群衆、なんとか事態と收拾させようとするローマ総督。十字架の第一ステーションはそんな場面です。では、そ

ここに立つ私たちは、何を見、何を想えばよいのでしょうか。まずは、自らをふりかえってみることでしょう。

ユダヤの人々はイエスを十字架に追いやった民族として嫌われ、迫害された時代もありました。しかし、聖書は、イエスを十字架につけたのは、異邦人であるピラトの罪でもあったと教えています。イエスはユダヤ人によってだけでなく、異邦人によっても十字架に追いやられたのです。イエスはそのことを予告して、こう言っておられました。「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。」（マルコ 10:33）その異邦人の中に私たちが含まれています。聖書は、ユダヤ人も異邦人も、すべての人が罪を犯したと教えています。ローマ 3:23 に「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、……」とある通りです。「すべての人」ですから、そこに自分が入っていないわけではないのです。

私たちは、ユダヤの宗教指導者のようではないかもしれませんが。しかし、それに同調して、「イエスを十字架につけろ」と叫んだ群衆の一人であるかもしれません。保身のために良心を抑え込んだピラトのようかもしれません。もし、自分がその場にいたらどうしただろうかと考えてみたいと思います。

そして、次に、見るべきものは、イエスのお姿です。第一ステーションに限らず、どのステーションでも、私たちが見るべきお方は、イエスです。ピラトは、イエスを群衆の前に引き出して、「見よ。この人だ」（ヨハネ 19:5）と言いました。ラテン語で「エツケ・ホモ」と言います。「この人を見よ」という言い方のほうが良く知られています。これは、神がピラトの口

を使って私たちに語られたものです。神は、私たちに「この人を見よ」と言って、聖書に描かれたイエスの姿に目をとめるよう求めておられるのです。

きょうの箇所には、祭司長たちや長老たちが訴え、不利な証言を次々とまくし立てているのに、イエスがそれに対して何もお答えにならなかったことが書かれています。14節には「それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた」とあります。

イエスのこの沈黙は、イザヤ 53:7で、すでに預言されていました。「彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」イエスはゲツセマネの園で、「わが父よ。わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」（マタイ 26:42）と祈り、父なる神のみこころに従って、神の裁きの杯を飲み干す決意をされました。どんな偽りの証言にも反論せず、人々が訴えるままに罪を背負われたのです。

「罪を背負われた」といっても、もちろん、ご自分の罪を背負われたわけではありません。聖なる神の御子にどんな罪もありません。「すべての人は罪を犯した」ののですが、イエスはその「すべての人」に含まれないお方です。イエスが背負われたのは、私たちの罪です。そこにはイエスを死に追いやった罪、偽りの証言をした罪、それに同調した罪、イエスに罪のないことを知りながらイエスを十字架に引き渡した罪が含まれます。イエスが背負われたのは、すべての人が犯したすべての罪です。イエスの沈黙は、それらすべての罪を背負われたことを意味します。ペテロ第一 2:22-25 にこうある通りです。「キリス

トは罪を犯したことがなく、その口には欺きもなかった。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、脅すことをせず、正しくさばかれる方にお任せになった。キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒やされた。あなたがたは羊のようにさまよっていた。しかし今や、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰った。」

私たちもイエスのお姿に倣いましょう。すべてをご存知の神の前では、私たちは自分の罪についてどんな言い訳をしても通用しません。自分の罪を認め、神が自分をどのように裁かれたとしても、それは正しいと認めましょう。そして、神が、その裁きを私たちにではなく、イエスに向けられたことを信じましょう。それによって私たちの罪は赦されました。たましいの傷は癒やされました。人生にさまよっていた私たちも、羊飼いである神に守られ導かれ、神の牧場で平安のうちに過ごせるようになったのです。

私たちのため苦しみに耐え、救いの道を開いてくださった主を、「この人を見よ」との言葉のとおり、主を見つめ続け、主の御顔の光に照らされ、一日一日を過ごしたいと願います。

### (祈り)

父なる神さま、私たちにピラトの前に立たれたイエスのお姿によって、使徒信条が「主はポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と言っていることの意味を悟り、この信仰の告白を新しくすることができました。ピラトの罪は私たちの罪です。しかし、そんな私たちの罪のすべてを主は背負ってくださいまし

た。十字架に表れた愛と恵みを心から賛美します。私たちを、愛と恵みに導かれ、それに感謝して、日々を歩む者としてください。イエス・キリストのお名前です。